

妻として、母として、娘として



大山秀子

立教大学理学部化学科
[171-8501] 東京都豊島区西池袋3-34-1
教授, 理学博士.
専門は多成分系高分子材料の構造と物性.
hideko-oyama@rikkyo.ac.jp
www2.rikkyo.ac.jp/~z3000410/index.html

私は私が3代目となる化学者の家に生まれ、アカデミアの世界はとても身近でしたが、自分自身が現在の生活に辿り着くことを目指してまっしぐらに歩んできたわけではありません。その時々の中置かれた状況に応じて自分ができることや大切にしたいことを一つ一つ選択し、時には闇の中を迷いながら手探りで進んできたという表現が一番相応しいように思います。

私は修士課程修了後、夫の都合でアメリカでの生活を余儀なくされることになりました。その時、アメリカ社会ともつながりを持ち、少しでも一人の人間として自立したいと考えました。そこで、夫が大学院時代に履修した高分子の授業が素晴らしかったというので、その先生にコンタクトを取り、彼の研究室で実験をさせてくれないかとお願いしてみることにしました。それがStanford大学のCurtis W. Frank先生との出会いでした。拙い英語で緊張しながら先生と面談したことを今でも忘れません。しかしそのお陰で、毎日大学の研究室に通って実験をし、授業にも参加させてもらい、成果が出てくると大学院生並みの給料ももらえるようになりしました。その当時、Paul J. Flory先生もまだご健在で、よくキャンパスやセミナーでお見かけしましたが、世界中から一流の学者達が講演に来て、大学院生とも分け隔てなく気軽に議論する開かれた雰囲気大きな刺激を受けました。

しかし、第一子の妊娠がわかった後、私は酷いつわりに悩まされ、とても実験室に通えるような状況ではなくなってしまいました。また、夫はそれまで勤めていた企業を辞め大学に移る決心をしました。アメリカの大学ではテニュア(終身雇用制)の資格をとるまでの数年間は必死に働いて論文を書き、研究費を獲得し、自分の有能さを認めてもらわなければなりません。その時の私にはテニュアをとるまでの夫を支える必要があったこと、また子供にはアイデンティティ確立のためにしっかりと日本の言語と文化を教えたかったこと、そして何よりも子供の成長の一瞬一瞬を母親として大切にしたいことなどから、私は家庭で家族を支え

ることにしました。それとともにその間を利用して博士論文をまとめ、論文博士の審査を経て、東工大より博士号をいただくことができました。

2番目の子供が一歳半になったのを契機に、ハーフタイムのポストドクという無理なお願いをして、少しずつ研究生生活に戻りました。そして子供の成長と夫の仕事の状況に合わせて、自分の仕事の比重を少しずつ増やしていきました。結局、15年間のアメリカ滞在中、不安定なポジションで3大学で研究を続け、そのたびに研究テーマも変わりましたのでそれなりの苦労はありましたが、多様な研究スタイルや考え方に接することで得難い経験をすることができました。そして、日本に帰国した後は大学の研究員、公的研究機関の勤務を経て、現在の大学に移りました。

このような私の紆余曲折の道のりから、「チャレンジをすることで可能性は生まれ、意志があるところには道が自ずと開かれる」こと、そして、家族の状況で自分のキャリアを第一にできない場合があったとしても、時間をかけてコツコツと積み重ねていきさえすれば、必ず「塵も積もれば山となる」こと、そして「支えてくださる人がどこかに必ずいる」ことをお伝えしたいです。私の場合、ある時期は「妻」として「母」としての立場を第一にしてきたため40代まで正規のポジションを得ることができませんでした。恩師、友人達、そして家族の存在のお陰でここまで細々でも仕事を続けてこられました。さらに私は今、「娘」として、今年90歳を迎える父の自宅介護という新たな課題に取り組んでいます。

女性の社会進出を援助するさまざまな制度がたとえ整ったとしても、これまでの男性中心社会に存在していた「女性はこうあるべき」という考え方から解放されて初めて本当の意味での男女共同参画の時代がやって来るのではないのでしょうか。そういう日の実現を目指して若い世代の人々と一緒に微力ながら私なりの努力を続けてまいります。